

「共生」社会を形成する市民の育成に向けて：  
対話の中で考えを深める道徳授業プランの提案

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00010224">https://doi.org/10.14945/00010224</a>

# 「共生」社会を形成する市民の育成に向けて

—— 対話の中で考えを深める道徳授業プランの提案 ——

大村 愛

Toward the Development of Citizens for an Inclusive Society:  
A Proposal for Deepening Ideas through Dialog in Moral Education  
Ai OMURA

## 1 問題の所在

### (1) 問題の社会的背景

本研究の出発点は、「なぜ集団は個を排除するのか、そして受け入れるのか」である。「排除」は、子どもの社会のみならず、大人社会においても存在する。政府の主導によって、「多様性の尊重」や「障害者差別解消法」「インクルーシブ教育」が謳われる一方で、異民族に対するヘイトスピーチ、障害者の不正雇用、東日本大震災の影響による福島原発の被災児童に対するいじめ等、目指す社会の姿に相反する現実が連日報道される。

### (2) 問題の理論的背景

正高(2007)は、ヒトがもともと持つ他への攻撃性を指摘する。それが社会的集団の中で発揮され、社会を構成するマジョリティの同調が生じると「排除」は生じる。それが逃げ場のない閉ざされた空間で発揮された時の抑止は困難を極めるが、この国の伝統的なシステムでは、学校も、職場も、住む町も簡単には変えることはできず、固定的閉鎖的な集団で活動は行われ、今後もそれは継続していくことが予想される。しかし、一方で、「排除」が起こりにくい、または緩和される集団があることも事実である。本研究では、どのような条件や環境を整えることが「排除」の抑止、緩和につながるのかを解明していく。

### (3) 目指す社会の姿

本研究において目指す社会の在り方は、「誰もが包摂される」「共生」社会である。具体的に表現するならば、異なる価値観や文化の多様性が尊重され、個の持つ特性によって排除されことなく社会参画が保障される世の中である。その結果、多くの人々が社会的・経済的に自立することが可能になる。本研究では、学齢期からの経験やそれによって形成された文化によって将来の社会が形成されると考え、学校教育を通して「共生」社会の理念と必要性に触れることで、よりよい社会の形成者の育成につなげていく取組を提案する。

## 2 「排除」に対する子ども達の捉え

### (1) いじめられる側にも問題がある

「いじめられる側も悪いというのは誤りだ」というのが文部科学省の公式見解であるが、子ども達や教師の一部には、「いじめられる側にも問題がある」と考えている者が少なくないことが本研究を通して気付くことができる。その理由としては、「やるべきことをやらない」「自分勝手」「性格が悪い」などが挙げられている。いじめられる側にも問題がある、という考えが、集団にある場合、問題の解決は非常に難しいことが予想される。

## (2) スクールカースト

子ども同士の相互関係における平等性については、「スクールカースト」なるものが存在し、決して平等ではないことを指摘する研究者がいる。森口(2007)は「スクールカースト」を「クラス内のステイタスを表す言葉」とし、鈴木(2012)は「同学年の児童や生徒の間で共有されている『地位の差』」と定義している。鈴木(2012)が行った調査により、「スクールカースト」上位層は集団内において、集団の行動やその場の空気を決定する際の発言権と影響力を持ち、中間層、下位層へと下がるにつれ、それは失われることが明らかにされている。子どもたちの相互関係は平等ではなく、その中でいじめが起きた時、被害者は大抵カースト下位層の者になり、当時者の多くが「いじめられる側にも問題がある」と捉える、ということが容易に想像できる。

ならば、そこに介入できる唯一の存在である教師は、どのような役割を果たすことが求められるのか。学級、学校という閉鎖的な空間において、教師はいかにして、いじめ抑止力となり得るかという視点をもって、本研究の目的・方法を設定していく必要がある。

## 3 研究の目的

本研究の目的は、学校教育における教育活動を通して、「排除」を緩和し、「誰もが包摂される」「共生」社会の形成者を育成することである。対話を通して、子どもたち1人1人が、「共生」や「包摂」について思考し、社会の形成者として、将来の社会の在り方をよりよいものにするために、自分自身がどのように考え、生き方を選択していくかを模索する授業展開を目指す。

## 4 研究の方法

本研究のアクションリサーチは、A中学校2年生を対象として行い、3期(Stage I～III)に分け、道徳授業を展開する。プレ研究として被排除生徒を対象とするインタビューを行い、「排除を緩和するための要素」を抽出し、それを考慮して、道徳資料、授業案を作成する。

授業実践ごとに、実習校職員と共に事後検討会を行い、授業プランを改訂していく。Stage Iは、対象の特性を掴み、「多様な価値観の受容」「スクールカーストの影響下でない環境」を設定し、「誰もが意見を尊重される道徳授業」を展開する。Stage IIでは、原沢(2013)のアサーティブ・コミュニケーションの理論を取り入れ、「全ての生徒の意見が必要とされる道徳授業」を設定する。III期は道徳資料の内容に、「排除を行う正当な理由の有無」の議論も関連付け、「共生」のテーマを取り上げ、「自律的に自らの生き方を考える」授業を設定する。

研究の場を道徳とする理由としては、対象生徒に「自律的に考える」場面を設定し目的を達成しようとする本研究の方針と、教科化されるにあたって「考え議論する道徳」を目指す道徳科の方向性が合致するからである。生徒の変容は、実践における生徒の記述・発話・行動等の記録から分析し、時期や集団の違いを比較すると共に、否定的な表れにも着目することとする。

## 5 プレ研究 ―排除を緩和する要素を抽出する―

プレ研究の調査では、被排除生徒3名を対象とする観察とインタビューを通して、「孤立する個は孤立を求めているのではない」こと、「排除」を緩和するためには、被排除者ではなく、マジョリティに働きかける必要があることに気付いた。また、被排除生徒3名の内の1人が、学校生活

において孤立傾向から、集団的活動に対して積極的になっていく過程を観察し、観察記録や生徒記述等に基づき、「排除を緩和するための要素」として7点を抽出した(表1)。

## 6 道徳プランの作成

道徳授業案は、表1に示した留意点を踏まえて作成した。Stage I では、研究対象生徒集団の人間関係や学び方の趣向を知り、Stage II では、他者との対話を深める手立てを仕組み、Stage III では「共生」社会を形成する市民の育成に向けての道徳授業を展開した。Stage III では、授業振り返りの記述から表1 ①～⑦に合致する生徒の表れの変容を見ることとした。なお、I～IIの過程で生徒の表れに応じ内容の改定を行った。表2は最終的に実施されたプランである。

表2 道徳授業プラン

Stage	Action	道徳授業
I	対象集団の特性を捉え「多様性の尊重の育成」に向けて道徳を立案、実践する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団生活に関するアンケート</li> <li>・体験を通し人との関わり方を考える道徳</li> </ul> シグナルII キャッチボールはいい気持ち(寛容)
II	Iでの表れを基に、IIでの実践プランを改訂する。対話を活性化をねらう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対話を活性化し、多様性を尊重する道徳</li> </ul> 私がかんばるとクラスがよくなる(集団生活の充実) 人と自分の感じ方、意見の違いを楽しむ(寛容)
III	I～IIの結果を生かして、「共生」をテーマにした3部作を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を持つ人に対する排除と包摂</li> <li>・LGBTの人たちの社会参画</li> <li>・中高生の社会の世界的排除</li> </ul> 共に生きる(公徳心) 「めんどくさい」に取り組む理由(公徳心) 「中高生の世界の共生はどうか?」(社会正義)

## 7 Stage I - 集団の実態をつかむ -

Stage I では、自主性や表現力の育成し、他者との協調を通して相互に尊重し合う経験を積むことができるインプロゲーム「イエス・レッツ」を活用した道徳授業を行った。「イエス・レッツ」は、1人が提案した行動を皆で行うゲーム性の高い活動であるため、多くの集団は盛り上がる事が多く、活動を通して、他者との良い関係性を築くために、互いへの気遣いや思いやりが自然に生じていることに気付くという授業プランである。研究対象生徒集団は、日常生活においては、「遠慮のない物言い」や「男女

表1 排除を緩和するための7つの要素

- ① 「いじめられる側にも問題がある」という認識の否定
- ② 教師が多様な価値観を尊重することによるスクールカーストの影響の軽減
- ③ 「他者肯定感」「自己肯定感」を認識する場の設定
- ④ 信頼関係に基づく秩序の形成
- ⑤ 社会的欲求、承認欲求の充足
- ⑥ 内発的動機付けに基づく目的・目標の共有
- ⑦ 集団生活を向上させる自律的な思考力、判断力、行動力の育成

表3 Stage I 活動中の生徒の発話(抜粋)

- T : 「いう(提案する)人」になるとみんなどうなの?
- S1 他: 緊張する? オレしない。(緊張するー。緊張する人もいる。)
- T : ああ、緊張する人もいる。人によって、ね。
- S1 他: うん、ああ、人によって。
- T : とまっちゃうと、どんな感じ? なんて思った?
- S2 他: やばいって思った。超焦る。空気よめ〜とか思われそう。
- T : やばいって、焦るって。待ってるほうは?
- S1 他: そんなこと思わん。なんとも思わんか…。
- S3 他: 気持ち分かるなあ、うちでも絶対やばいって思う。
- T : あー、一緒なんだ。一緒だって。
- S1 : (笑顔)

Stage I では、生徒の人間関係に課題を感じたため、Stage II においては、他者との交流が成されやすい形を設定するためアクティブ・リスニングとジグソー法を取り入れた実践を計画した。

Stage IIは、生徒同士の交流や対話の活性化をねらいとし、ジグソー法とアクティブ・リスニングを取り入れた。時期に合わせ、合唱練習を題材にしたが、彼らの活動意欲は低く、授業を通して改善しなかった。カースト上位の生徒は道徳授業に関心が薄く、彼らが作るネガティブな空気について中間層の生徒の同調が生じていた。授業構成自体の問題点も視野に入れ他集団で同授業を行ったところ、一定の成果が得られた。よって、対象生徒集団の学習意欲を高め、対話を活性化させるために「考えずにはいられない」「他者の意見を聴きたい」と思わせる題材を立てる必要があるという結論に至った。

9 StageⅢ－「共生」社会を目指す道徳授業で教室の何が変わるか－

表4 「共生」1部(道徳4)掘り返り記述

[illegible]

2部は、映像資料を使用し、「LGBTの人達の雇用に奔走する経営者」の姿から、主発間に取り組んだ。困難に挑む主人公の魅力もあり、生徒たちは全員映像にのめり込み、「考えずにはいられない」道徳に一步近づいた感触を得た。生徒達からは、カムアウトした主人公への敬意や、「めんどくさくてもそれ以上に大切なこと」「主人公のためにやっているのではなく、自分がやった方がいいと思っているからやっている」など、他者肯定や内発的動機付けに関わる内容の発言が聴かれた。振り返りの記述では、カースト上位生徒1人を除いて、「共生」についてポジティブな捉えが見られた。この授業は、研究の全過程の中で、最も生徒達の気持ちが動いた場である。生徒達の対話に教師が参加し、紙面参加の形で、静岡大学教職大学院の伊田勝憲先生の「善いことは、たいていめんどくさい。めんどくさいことに価値がある。そして、私たちはそれでもめんどくさい道を選ぶのだ、そこに価値を見出すのだ」という言葉、実習校教頭の「めんどくさい、は確かだけれど、でも、世の中を変えていく人ってみんなめんどくさいことに取り組んできた人ばかりだよ」という言葉を生徒たちに紹介した。大人が生徒達と同じ視点で対話に参加することは、対話を活性化することとなった。本時では、カーストを問わず、複数の生徒から「排除を緩和するための7つの要素」に関わる記述が見られた(表5)。ネガティブな表れを見せたカースト上位生徒1人は、「大人はきれい事ばかり」という言葉を記述に残した(表5-A)ため、次時は、「(大人)社会の問題から、中高生の社会における問題に着目する」ことを生徒たちに強く認識させ、高校時代の陰口に始まる主人公が困難に対峙する姿を資料とした。

3部では、全ての生徒の主体的な取り組みが感じられた。資料の主人公は、頭蓋骨に障害がある女性で、高校生時代にいじめを受けた時、それに負けず全校集会で障害に対する理解と自分の思いを訴えるという行動に出る。主発間は「なぜ彼女は、陰口に負けることなく、全校生徒の前で思いを訴えることができたのか」である。1人1人がカードに意見を書き、黒板に全体で1つのKJ法を展開する形で考えを共有した。

「共生」最後の授業である本時では、カーストによらず、全生徒が授業に主体的に参加し、カードに書く形で意見を表明した。黒板にカードを張りにいく際に、互いに見せ合ったり、教師に見せて認めてもらったりする様子が見られ、承認欲求の充足が窺えた。表6 A~Hは、生徒の記述を「排除を緩和するための7つの要素」に分類したものの、各々が自分の過去の過ちに言及したり、正しいと思う行動を自分が実行できるかどうかの葛藤を記したりするなど、多様な表れがあったことを示す。前時まで、一貫して授業に反発していたカースト上位生徒

表5 「共生」2部(道徳5)振り返り記述

カースト	氏名	①自己肯定	②多様性	③対人関係	④他者肯定	⑤自己肯定	⑥道徳・倫理	⑦社会性	⑧承認欲求	⑨自己肯定
上位層	5									
	1									
	9	○	○		○				○	
	2									
	3									
	7		○		○				○	
	2									
	1				×					
	7	○	○							
	6	○	○							
中間層	10				○					
	6						○			
	2				○					
	8						○		○	
	8						○			○
	4									
	6	○	○		○					
	5				○					
	7		○		○				○	
	8				○					
下位層	7		○							
	3		○							
	3		○							
	3				○					
	3									

表6 「共生」3部(道徳6)振り返り記述

カースト	氏名	①自己肯定	②多様性	③対人関係	④他者肯定	⑤自己肯定	⑥道徳・倫理	⑦社会性	⑧承認欲求	⑨自己肯定
上位層	6	○			○					
	5		○							
	9	○								
	5									
	7				○					
	8				○					
	3				○					
	6									
	9	○	○		○					
	7				○					
中間層	9				○					
	7				○					
	5				○					
	5				○					
	9				○					
	4				○					
	7				○					
	6				○					
	9				○					
	8				○					
下位層	6				○					
	4				○					
	3				○					
	3				○					
	3				○					

※ ○は該当項目について肯定的記述があったもの、×は否定的記述を表す  
※ 数字は記述行数を表す

1名も、本時はカードを1番最初に黒板に貼りに来るなど、前向きに取り組む様子が見られた。

## 10 総合考察

### (1) 成果

表7に示す通り、振り返り記述に見られる「排除を緩和する7つの要素」に関する内容は、回を重ねるにつれて記述が増加しており、複数回で取り扱うことの効果を見ることができる。生徒たちが身近な問題として捉えない内容こそ、実態に応じて繰り返し取り扱う

ことが必要であることが分かる。また、スクールカーストの軽減と承認欲求については、記述ではなく、授業の中で生徒達が作り上げる空気にはそれは表れていた。生徒達の固定的な人間関係は未だ消えないが、授業の中で「対等な関係性」を積み重ねることで効果があると考えられる。

また、成果として教師の変化も挙げられる。生徒達の率直な意見表明は、教師陣を「共生」の問題に、真剣に正面から向き合わせることになり、結果的に教師の倫理観、道徳観を生徒達に伝えるきっかけになったといえる。それがさらに、生徒達の対話や思考の深化を促したと言える。

### (2) 課題

課題は以下の3点である。

- ・授業で学んだこと、考えたことを他に転移、汎化していくことを伝える手立てを工夫する。
- ・対話を促すため、「考えずにはいられない」資料を開発する。
- ・体験的活動を導入し、他者と異なる経験を得て対話の必要性を強化する。

### (3) 今後の展望

今後の展望は以下の2点である。

- ・道徳以外の教科・領域で「共生」を取り上げ、あらゆる学校生活の場面で、「多様な文化、価値観の人がいる社会で何をするか」という前提が自然に生まれる学校文化を形成する。
- ・自分の成果の他者との共有を図る。教師仲間だけでなく、異業種の知人とも連携して、マイノリティの社会における受け皿を学校、地域が協働して作り上げることを目指す。

表7 生徒振り返りに見られる「排除を緩和するための7つの要素」

「排除を緩和する7つの要素」に関する記述の視点	割合	道徳4	道徳5	道徳6
①「いじめに理由は成立しない」に関する記述	(%)	0.0	20.0	50.0
②-1「多様性の尊重」に関する記述	(%)	46.7	36.7	23.3
②-2「スクールカーストの影響の軽減」に関する記述	(%)	0.0	0.0	0.0
③-1「他者肯定感」に関する記述	(%)	20.0	43.3	53.3
③-2「自己肯定感」に関する記述	(%)	0.0	3.3	30.0
④「他者との信頼関係や集団の秩序」に関する記述	(%)	0.0	0.0	36.7
⑤-1「社会的欲求」に関する記述	(%)	0.0	13.3	13.3
⑤-2「承認欲求」に関する記述	(%)	0.0	0.0	0.0
⑥「内発的動機付けに基づく目的・目標」に関する記述	(%)	0.0	16.7	6.7
⑦「集団生活を向上させる自律的な思考」に関する記述	(%)	0.0	3.4	50.0

## 11 引用・参考文献

- 原沢伊都夫 (2013). 異文化理解入門 研究社  
 正高信男 (2007). ヒトはなぜヒトをいじめめるのか 講談社  
 森口朗 (2007). いじめの構造 新潮新書  
 鈴木翔 (2012). 教室内カースト 光文社新書